



1990年10月号
449号

塩釜遊佐一貫堂とサフラン湯
(蜜紅華湯)

次

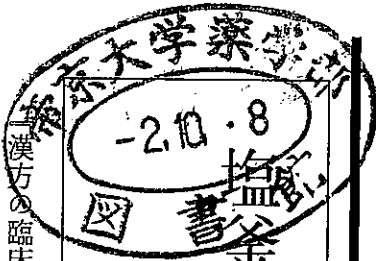
管見植物記 V ヒマワリ	藤井正美
傷寒論再発掘 69	遠田裕政
成都学術交流旅行を終えて	小野正弘
精解類聚方広義 (十五)	根本義雄
ローカルブック日本の薬草 7	浜田善利
「群馬の薬草」	

目次

カット題字 西田明史

塩釜遊佐一貫堂とサフラン湯 (蜜紅華湯)

矢数道明



私は「塩釜の遊佐一貫堂について」と題して随想を綴った。宮城県医師会史編纂のとき、塩釜市の編纂委員村主巖氏の調査された資料をお借りし、いろいろの方々からのきき込みや、仙台人名大辞典などを参考にしましてまとめたものであった。そのとき塩釜一貫堂サフラン湯のことについて、「本舗家庭薬基準処方」や、戦後出版された「家庭薬全書」などを調べて頂いたが、富山の太陽堂サフ

ラン湯、岡山のサフラン湯の名はあったが、塩釜一貫堂のサフラン湯の名はついに発見できなかったという。戦時中は、婦人薬にも統制が行なわれ、実母散、順血湯、保命湯など七十三種の婦人病薬は、一律に、桂枝・芍薬・茯苓・当帰・川芎・川骨・朮・青木香・牡丹皮各一〇、甘草〇・八、紅花〇・二グラムに統一されたという。サフランは殆んど紅花を用い、本物のサフランのときは〇・一グラムにしていたということであっ

た。その頃、日本三大婦人病薬の一つといわれていた塩釜の遊佐一貫堂サフラン湯の名が見当たらないというところで、残念ながら諦めていた次第である。

ところが、前述の記事を『漢方治療百話第七集』に登載し、出版祝賀会を行なった後、高崎市に古くより漢方薬局を開き、環境衛生の研究で学位を得られている温知会の平木陽一氏より、懇切な書信が寄せられた。

平木氏と同じく東北薬大卒である氏の次女に当る方が、七集のサフラン湯のことを読んで、塩釜神社(古い歴史のある安産守護の神社)で結婚式を挙げられた、同じく東北薬大出身のご長女の挙式の日、神社の階段の下で、その看板を見た記憶があるとのことで話が進展し、長女の方が、現在東北薬科大講師として勤務されている、塩釜出身のご主人とご一緒に、あれこれと詳しくお調べ下さって、現在市販されている「塩釜さふらん湯」の現物を捜して、説明書と共にお送り下さった。全く思いもかけぬお便りであった。

これで小生の胸のわだかまりはすべて解消された訳であるが、送って下さったそのさ・ふ・らん・湯の箱を手にとってみると、えもいわれぬ芳香がた

志波彦神社
鹽竈神社

参拝の枝折



だよ、なつかしい思いが甦ってきた。箱の表右側に「和漢薬製剤」、中央に「塩釜、蛮紅華湯」とあり、左右に芍薬とサフランの開花葉草があしらわれ、左上に登録商標の、弓を持った神功皇后が部下を従えた絵がシンボルとされている。効能としては、頭痛・息切れ・動悸・逆上・月経不順・眩暈・四季感冒・浮腫・悪阻・古血滞り・手足腰の冷え症・不眠・神経痛・ヒステリー・産前産後・下腹腰の痛み、と書かれている。

前記統一内容と少し異なり「味多く、その一日量は、サフラン〇・〇一、ケイヒ〇・六七五、ダイオウ〇・四五、ソウジュツ一・三〇、シャクヤク二・〇〇、チョウジ〇・五〇、カズウ〇・五〇、オウレン〇・二〇、ブクリョウ〇・九七五、センコツ二・〇〇、トウキ〇・五〇、センキュウ二・〇〇、モッコウ〇・一〇、以上十三種合計一一・二二〇グラムが一包、一箱に五包入パックが二個、計十包が入っており、定価九五〇円としてある。一日分一包を一八〇cc（二合）の熱湯で振出し、食前服用し、その後二六〇cc（二合五勺）の水を加えて煎じ、就寝前に服用する。十日分入が九五〇円で、いかにも安価である。試みに振り出して味ってみると、なかなかのみやす

く、よい香りである。現在の製造元は塩釜蛮紅華湯株式会社で、工場は名取市下余田字鹿島一〇としてある。

○ 遊佐一貫堂は、

薬局二代目のとき、東京銀座に居を移したことがあるが、やがて権利を「鈴彦」

（東北薬專二回目卒）の傍系会社に移譲したという。現在は難かしい昔の字を用いて、図のように「鹽竈蠻紅華湯」として永い間の信用を挽回し、遊佐一貫堂の名はなくなったが、塩釜さふらん湯として東北地方一帯の薬局、薬舗で販売されているとのことである。

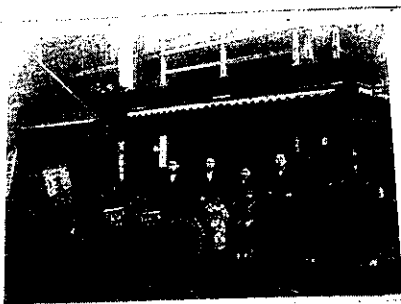
また筆者の恩師森道伯翁の若き日師事した産婦人科医の遊佐大薬は、どうもこの遊佐快真と訂正の必要があると思われる。このたび快真の出身地は鳴子町であることが判明したという。そして二代に巨り塩釜神社前で産婦人科医を開

和漢薬製剤

鹽竈

蠻紅華湯

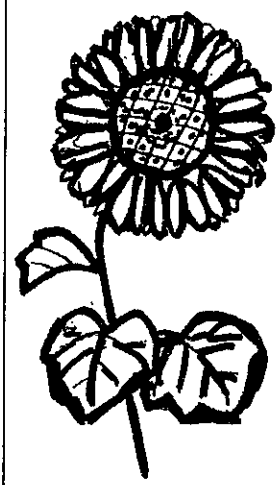
業し、三代四代は薬局で、一貫堂の看板は塩釜神社博物館の倉庫に保存されているとのことである。右のような事情を、お忙しい中を、詳細に巨り、写真まで捜して調査



(Ⅲ) 初代薬局の頃の遊佐一貫堂
(車の上の箱に一貫堂の字がみえる)

(Ⅱ) 現在市販されている塩釜
さふらん湯箱上の写真

管見植物記 V ヒマワリ



藤井正美

(神戸学院大学薬学部)

数学は一から始まり九で終る。消化管は口から始まり食道、胃、十二指腸、小腸、盲腸、大腸、直腸、そして肛門の九で終る。九は暗黒から明るみの見えかける場所でもある。その肛門を抱く部分は「体」を示す尸の中に入れて尻という、は前号の記。口から入った米と水は体内を通り過ぎて「屎尿」と字は書く。また、坊主頭だけ見てもオスメス解らない。しかし体の中の隠れた所に「細い割れ目(ヒ)」をお持ちの方は「厄」である。

穴という字がある。家を示すウカンムリ「ム」に八の字。八とはオケラが両手を広げて穴を掘るの画と考えればいい。穴とは穴居住宅のことに他ならない。突き抜けていないのが穴。食物にとっては口から入って各種修養に務め奥深くを辿りてよう

やく九に至る。だから知識が山と積み込まれ、やがて明りがかすかに見えてくる望みを「究」めると書く。字意から云えば研究者とは尿が大きい溜まり、出かかって余り出ない人のこと。つまり研究者とは字意は慢性便秘の人のことだ。昔昔、とある研究者がふとタデ科の植物の根をかじってみた。一挙に出してしまった。見る程に大きな黄色の巨塊。ウン、この根は「大黃」と名付けよう。

表 国民1人・1日当たり供給熱量の推移

	穀類	油脂類
昭和41年度	1,385.9	194.4
42	1,360.4	197.5
43	1,327.8	208.6
44	1,291.7	218.2
45	1,260.5	227.1
46	1,240.8	233.5
47	1,225.8	246.5
48	1,219.9	258.2
49	1,206.5	275.4
50	1,191.4	274.5
51	1,179.1	276.9
52	1,151.2	282.4
53	1,132.7	297.8
54	1,113.3	300.7
55	1,111.5	219.5
56	1,095.5	336.1
57	1,083.0	337.8
58	1,071.0	340.7
59	1,070.2	351.0
60	1,062.9	357.6

(単位 キロカロリー)

戦後日本人の食成分でもっとも変わったのは米(炭水化物)が減って脂肪(油)が増加したこと(表参照)。動物脂肪の増加が腸癌の増加―戦後40年で二―三倍以上、植物油を含む脂肪食の増加が乳癌増(同三倍)に結びつくという見方はほぼ正しい環境発癌だろうとされている。炭水化物と脂肪では消化上、胆汁液の出方がちがう。三―六倍だ。何せ胆汁は油の乳化を司る消化液である。昔の

人のように穀物を主体にエネルギー源としていた頃のドクロ塊の画は黄色だった。今では大抵の人は濃茶く黒



(IV) 盛業時代の遊佐一貫堂薬舗(逢釜神社階段の下にあった)

褐色である。時代が違えば「大黃」は「大茶」と名付けられたかもしれない。九から脱線してしまったが、九とは最も数の集まった字でもある。いつも集まっている鳥を鳩という。色々のものを手でかき集めて合わせてしまうことを手へんに合うと書いて拾という。後世の会意文字。十とは全部を集めて一単位とすることがこの画で示されこれから象形文字の十となる。この原画は公衆便所の落書きで度々お目にかかるが落書きは「ヒ」のこと。しかし画も単純だが脳も単純だ。わが高校時代のトイレには朝顔の上に「今、汝は人類の未来を握っている」なんて落書きしてあったと質のこと言っても、旧人類が何言っとるかだ、劇画時代だ。

下さった。平木陽一博士をはじめご息女姉妹ご一族に對し心より厚くお礼申し上げる次第である。

× × ×
× × ×